

読み聞かせ講座 小さい子向け

たのしいおはなし会をもつために
～子ども読書活動交流集会（実技編）～

講師：坂本 由紀子（児童図書館研究会
会員 元公共図書館司書）



○子どもと本とのかかわり

現在、低年齢化が進む中で、ブックスタート事業を行っている市町村が多くなり、地域支援・子育て支援など乳幼児への関わりが増している。

みなさんは「小さい子」と言った時に何歳をさすのか明確な定義を持っているだろうか？ おはなし会では、対象を「ひとりで聞ける子」（一般的には4歳くらいから）としても、実際に集まってくるのは乳幼児が多い。親も子どもへの接し方や絵本との付き合い方を学びたくて来ているケースが増えている。

午前中の中川さんの講演でも「のんびりが一番」というお話があったが、急ぎすぎはよくない。大人が都合のいいように育てていないだろうか。本来、子どもは自分で育つ力を持っている。大人は、必要な時に必要なサポートをしてやりたい。

○いま、絵本を子どもたちにどのように手渡すか？

(1) 聞く耳を育てよう

言葉をストックして成長していくこの時期には、親しい人からの語りかけや応答が大切。次のステップへの大事なポイント。

(2) 親へのアピールをしよう

一緒に参加している親に、聞くことの楽しさ、読むことの楽しさを知ってもらう。

(3) 子どもの観察をしよう

無理じい・先回りをしない。感想などを求めない。

(4) おはなし会はイベントではない

本来、おはなし会は地味で静かなもの、子どもに本を手渡す場である。

おはなし会は顔と顔、目と目を合わせられる少人数で行う。

(5) 親しい人が手渡す

CD付絵本なども出ているが、肉声で語ることが大事である。子どもの中に入れてもらって関係を作っていく。

(6) わらべうたの活用

わらべうたは耳から覚える、ゆったり安心のリズム。大人と一緒に楽しめる。

(7) 時間をかける

子どもと向き合ってふれあい、信頼してもらうことで、絵本に集中し、自発的に近寄って行くようになる。



○絵本と紙芝居の違い

絵本は、小さな絵本空間の中に子どもが入りこんで、全面的に向き合い、自分が主人公になるため、子どもによって頭の中のイメージ

ジが違う。紙芝居は、連続した映像の流れがある。違いを知った上で使い分けすることが必要である。

○おはなし会はいつごろから？

子どもに社会性ができて、集団になじむのは3歳後半くらいからである。

3歳前の子に集団で行うおはなし会は無理がある。子ども一人一人の様子を見て、注意深く対応していく必要がある。スタッフがたくさんいると目を配ることができる。

- ・無理じいをしない
- ・知育目的にしない

○おはなし会は共感の場

読書は1対1のものだが、おはなし会は他者とのかかわりがもてる。子どもは自分だけに読んでくれるのが大好きだが、また友達と一緒に聞くのも大好きである。

小さい子が多いおはなし会では、わらべうたで遊んでから絵本に入るとよい。

○実践例：わらべうた

一緒に歌って覚えましょう。

- ♪ ととけっこう よがあげた
- ♪ この子この子かっちゃんこ
- ♪ おでんでんぐるま
- ♪ 子ども風の子 じじばば火の子
- ♪ もちっこやいて

子どもが友達と手がつながるようになるのは3歳後半から。「こんにちは」と何気なく声を掛け、安心してもらおう。子どもの方からよく見てもらうことも必要。

子どもの目の高さに立ってみる。きちっと誠実に向き合い、えこひいきしないこと。

- ♪ えんやらものき
- ♪ じいじいばあ
- ♪ にぎりぱっちり

- ♪ うえからしたから おおかぜこい
- ♪ とんぼさん
- ♪ もどろもどろ もものはもどろ
- ♪ ここはどうちゃん にんどころ
- ♪ さよなら あんころもち

○トムの会（久喜）によるモデル例



- ♪ ととけっこう
- ♪ めんどりめんどり たまごをうんどくれ
絵本『こっけモーモー！』
おはなし「せかいでいちばんきれいな声」
絵本『おつきさまってどんなあじ？』
- ♪ チューチューチュー

参考：『おはなしおぼさんの小道具』

○最後に…

おはなし会はゆるやかに人間の成長と共にあるものである。長く読まれている定番をまず読むことをすすめたい。美しい文章に出会い、生きるための言葉を持つことができる。子どもたちひとりひとりに向き合いながら言葉と物語を手渡していくことが大事である。

○参考図書

『子どもが育つ条件』柏木恵子/著 岩波書店
『あかちゃんとお母さんのあそびうたえほん』小林衛己子/編 のら書房
『にほんのわらべうた①～④』福音館書店